

## 「濾紙を食い破る幼虫」

クリシギゾウムシ(栗嶋象虫)は、若いクリの実に卵を生み、クリの実の中で幼虫が育ちます。終齢になると、堅いクリの皮を食い破って外に出てきて、土にもぐります。持ち帰ったクリの実から幼虫が出てきた時、そのままにしておくと、干からびて数日で死んでしまいます。とりあえず、授業で観察に使うまでの間、湿らせた濾紙を入れた蓋付きシャーレに幼虫を入れておくことにしました。それを週明けに見て、びっくりしましたよー!



左側の写真は、幼虫を入れた当日です。すぐに濾紙の下にもぐりこもうとする行動が見られました。すでに穴が1個開いています。写真には写っていませんが、濾紙の下にも幼虫がたくさんいます。右側の写真は、3日後の写真です。ほとんどの幼虫はもぐっていて、更に濾紙がバリバリに食い荒らされて穴が開いていました。穴をあけてもぐったのか、もぐっていた虫が穴をあけて出てきたあとなのかは不明です。しかしよく考えると、クリの堅い果皮にも穴を開ける幼虫です。こんな湿ったやわらかい濾紙など、穴をあけるのはわけないことなのでしょう。

もう一つ驚いたのは、これだけ幼虫がいて、何も餌を与えていないのに、1匹も死んでいなかったことです。弱っているものさえありません。このあと、3年生の子どもたちと「幼虫が土にもぐる実験」をするために、生かしておきたかったのですが、結局2週間以上元気なままでした。教材としては、世話いらずで、非常に優秀なものだとわかりました。実際に釣り用の生き餌や、爬虫類の生き餌にも使えると聞きました。ユーモラスな動きで、世話もほとんど必要ないので、飼い方次第では「ペット」にもなるかも知れません。私もだんだんコイツらが好きになってきました。

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)